



セーファー・セックス実践志向に焦点をあてた Sexual-Risks-Scale日本語版の作成とその信頼性・ 妥当性の検証

田中, 祐子

(Degree)

博士 (保健学)

(Date of Degree)

2008-09-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲4454

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1004454>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏 名	田中 祐子
博士の専攻分野の名称	博士（保健学）
学 位 記 番 号	博い第 67 号
学位授与の 要 件	学位規則第 5 条第 1 項該当
学位授与の 日 付	平成 20 年 9 月 25 日

【 学位論文題目 】

セーファー・セックス実践志向に焦点をあてた Sexual-Risks-Scale 日本語版の作成とその信頼性・妥当性の検証

審 査 委 員

主 査	教 授	松田 宣子
	教 授	松尾 博哉
	教 授	法橋 尚宏

(別紙1)

論文審査の結果の要旨

氏 名	田中 祐子		
論文 題 目	セーファー・セックス実践志向に焦点をあてた Sexual-Risks-Scale日本語版の作成とその信頼性・妥当性の検証		
審 査 委 員	区 分	職 名	氏 名
	主 査	教授	松田 宣子
	副 査	教授	法橋 尚宏
	副 査	教授	松尾 博哉
	副 査		印
要 旨			
我が国では、HIV感染者の増加が問題となっており、15歳～24歳の合計数は全体の1割を占めている。その背景には、性交経験の低年齢化と、エイズ/性感染症の増加を引き起こす危険な性行動がある。これらの危険な性行動の原因は、十代の若者が感染の危険性を正しく評価していないことから、感染の予防行動につながらないと言われている。 本研究は、Sexual Risks Scale日本語版（以後SRS-J）を作成し、その信頼性と妥当性の検証をすることを目的とした。セーファーセックス（以後SS）の定義は、原版と同様である。内容妥当性の検討は、文化的修正として、薬物使用を嗜好品の使用とし、Drugをタバコに替えた。研究対象は、全国から任意抽出した公立学校の高校生で、調査方法は、自記式質問紙調査を行った（N=1722）。信頼性の検証は、折半法とCronbachのα係数を求めた。尺度全体としてCronbachのα係数は0.86と、折半法によるSpearman-Brownの相関係数は0.73で、内的整合性を認めた。妥当性の検証は、構成概念妥当性、基準関連妥当性、検証的妥当性、SRS-Jの得点の妥当性を行った。 主成分分析の結果、原版と同じ6因子（態度、ピアの役割、HIV感染の疑い、嗜好品の使用、可能性、意思）に分かれ、最終33項目を採用した。基準関連妥当性では、若者を対象とした「コンドーム使用に対するセルフ・エフィカシー測定日本語版尺度」を使用し、Pearsonの積率相関係数 $r=.67$ ($p<.01$) から相関を認めた。検証的妥当性では共分散構造分析から、RMSEA=.020, GFI=.999, AGFI=.942を得、SS実践のモデルの適合を認めた。SRS-J得点の妥当性では、SS実践に応じた得点を認めた。 以上の結果から、SRS-Jの信頼性と妥当性の確保が検証された。 本尺度は、高校生のHIV予防に向けて、理論に基づき、多面的にそのSS実践度を測れるものであり、性行動の活発な高校生にエイズ予防教育を行う中で、SSを普及させる取り組みの評価尺度として活用できると考える。今後の課題として、研究対象校が8			

校と少なく、地域性などの偏りが考えられるので調査規模を広げ、信頼性・妥当性を高め、一般化へとつなげる必要がある。また、実際SRS-J尺度を用いて、効果的な性教育につながるなどの実践での活用により有用性を高めていくことが期待される。

本研究は、セーファー・セックス実践度を測定する尺度を開発したものであり、日本の若者の性の健康増進に関わる重要な知見を得たものとして価値ある集積であると認める。

よって学位申請者田中祐子は、博士（保健学）の学位を得る資格があると認める。

掲載論文名・著者名・掲載（予定）誌名・巻（号）、頁、発行（予定）年を記入してください。

セーファー・セックス実践志向に焦点をあてたSexual-Risks-Scale日本語版の作成とその信頼性・妥当性の検証・田中祐子、岡本玲子・学校保健研究・第50巻（3号）、186-195
・2008年8月20日発行

(別紙様式3)

論文内容の要旨

専攻領域 看護学

専攻分野 家族・在宅看護学分野

氏 名 田中 祐子

論文題目

セーファー・セックス実践志向に焦点をあてた
Sexual-Risks-Scale 日本語版の作成とその信頼性・妥当性の検証

論文内容の要旨

我が国では、HIV 感染者の増加が問題となっており、15 歳～24 歳の合計数は全体の 1 割を占めている。その背景には、性交経験の低年齢化と、エイズ/性感染症の増加を引き起こす危険な性行動がある。これらの危険な性行動の原因は、十代の若者が感染の危険性を正しく評価していないことから、感染の予防行動につながらない、また、我が国の思春期エイズ/性感染症予防教育が、十代の若者の予防行動の評価に基づいて行われていないため、といわれている。そのため、専門家が危険な性行動を評価する手段をもち、高校生のエイズ/性感染症の予防意識を高め、予防行動の 1 つであるセーファー・セックス（以後 SS）を普及することが急務である。危険な性行動の要因には、「ピア・プレッシャー」、「タバコ、アルコール」などの非行行動や、意思決定などの心理的要因が影響するため、多面的評価が必要と言われている。しかし、日本のエイズ予防を目的とした SS の研究には、理論に基づき、多面的にその実践度を測り、得点化できるものはない。そこで、海外の、複数の理論からなる尺度で、思春期エイズ予防を目的とした Sexual-Risks-Scale が、日本の若者のエイズ/性感染症予防行動の評価指標及び、若者への SS の普及に適切であると考えた。

そこで本研究は、Sexual-Risks-Scale 日本語版（以後 SRS-J）を作成し、その信頼性と妥当性の検証をすることを目的とした。SS の定義は、原版と同様に、「SS とは、エイズウイルスの感染の危険性を減らす性行動を意味し、安全でない、危険な、無防備なセックスとはコンドームを使用しないセックスのことをいうか、あるいはエイズウイルスの感染の危険を増加する他の性行動のこと」を使用した。内容妥当性の検討は、文化的修正として、薬物使用を嗜好品の使用とし、Drug をタバコに替えた。

調査対象は、全国から任意抽出した公立学校の高校生で、調査方法は、自記式質問紙調査を行った (N=1722)。分析手順は原版通りに実施した。信頼性の検証は、内的整合性と安定性を行い、尺度全体として Cronbach の α 係数 .86 と、再検査法 t 検定 $p=.424$ で安定性を認めた。妥当性の検証は、構成概念妥当性、基準関連妥当性、検証的妥当性、SRS-J の得点の妥当性を行った。主成分分析の結果、原版と同じ 6 因子（態度、ピアの役割、HIV 感染の疑い、嗜好品の使用、可能性、意思）に分かれ、最終 33 項目を採用した。基準関連妥当性では、若者を対象とした「コンドーム使用に対するセルフ・エフィカシー測定日本語版尺度」を使用し、Pearson の積率相関係数 $r=.67$ ($p<.01$) から相関を認めた。検証的妥当性では共分散構造分析から、RMSEA=.020、GFI=.999、AGFI=.942 を得、SS 実践のモデルの適合を認めた。SRS-J 得点の妥当性では、SS 実践に応じた得点を認めた。以上の結果から、SRS-J の信頼性と妥当性の確保が検証された。Theory of Trying（以後 TT）を適用した

原版のモデルでは、高校生全体のモデルの適合度が悪かったため、男女別に作成した。原版のアメリカの大学生と日本の高校生の比較では、意思に影響する因子の大きさに差があった。アメリカの大学生は、態度、可能性、次いでピアの役割であり、日本の男子高校生は態度、ピアの役割、次いで可能性が、意思に大きく影響していた。日本の女子高校生は、可能性、態度、ピアの役割は意思に向かっていたが、意思からコンドームを使用する行動に向かわず、可能性がコンドームを使用する行動に影響することがわかった。以上の結果から、男子高校生は、WHO の勧告に示唆される SS への肯定的な態度や、SS に対する仲間との話し合いなどが、エイズ/性感染症予防行動の意思を強化すると考えられ、女子は SS 実践志向が男子より高いにも関わらず、予防行動に対して、意思が行動化されにくいことがわかった。

本研究から、SRS-J は、性に関する危険性を測り、SS を普及する尺度であるため、「SS 実践志向に焦点をあてた性リスク尺度」と命名した。今後、これは、思春期エイズ予防教育の中で、SS を普及する取り組みを行う際、その評価指標としての活用が期待できると考える。

指導教員氏名 松田 宣子